



# M I G A コラム

## 「世界診断」

2017年9月12日

西村 英俊

明治大学国際総合研究所フェロー  
東アジア・アセアン経済研究センター  
事務総長



東京大学法学部卒、1976年通産省入省。海外貿易開発協会アジア太平洋代表、通商政策局南東アジア大洋州課長、愛媛県理事、中小企業庁経営支援部長、日中経済協会専務理事、日中東北開発協会理事長等を経て、2008年6月より国際機関 ERIA(東アジア・アセアン経済研究センター)事務総長。早稲田大学客員教授、明治大学国際総合研究所フェロー、ダルマプルサダ大学文学部教授。

### 『ASEAN 50 周年の軌跡と将来』

2017年8月8日、東南アジア諸国連合（ASEAN）は創設より50周年を向かえた。1967年に中小国の外務大臣が集まって、一触即発の領土紛争、戦争状態を回避するためにとにかく「話し合い」を行う“Association”（連合）にすぎなかったASEANが、2015年末には、ASEAN政治安全保障共同体、ASEAN経済共同体、ASEAN社会文化共同体からなるASEAN共同体の創設まで達成した。今は2025年に向かって更なる域内統合に向けて努力を進めている。

ASEANの域内統合とこれまで一体不可分なのが「ASEANウェイ」である。これは全会一致と内政不干渉を原則とするASEAN独特の行動様式であり、多国間関係の実態を示すというより、むしろその相互交流が実行されるプロセスについて述べたものである。すなわち、このアプローチは、慎重、非公式、実用主義、功利主義、コンセンサス形成、非対立型交渉を実質的な特徴とするなど、そのスタイルは西洋の多国間交渉で観察されるような当事者対抗型で法律尊重の意思決定手順と対照的である。こ

うした「ASEANウェイ」の考え方は、「ムジャワラ（musjawarah）」と呼ばれる思想から来ているとされている。「ムジャワラ」の考え方によると、指導者は常にその他すべての参加者と議論を尽くし、その人の見方や感じ方を考慮に入れ、統合的な結論を出すように常に注意深くあるべきとされている。「ASEANウェイ」は文化、宗教、政治体制、信条その他さまざまに異なっているASEANにおいて、

合意形成や実行に時間を要するものの、着実に前進していくために ASEAN が見付け出した英知であると評価できよう。

これまでの ASEAN 統合という偉大なる航海は、常に危機を経験することによって鍛えられ、深化してきたと私は考えている。今から遡ること 20 年前の 1997 年にアジア通貨危機が発生し、タイのバツ暴落を端緒として東アジアの経済は一気に混乱に陥った。危機の最中である 1997 年 (ASEAN30 周年) に、ASEAN はクアラルンプールにおいて、「ビジョン 2020」を発表した。そこでは「我々は ASEAN の中に、加盟国同士と、世界と平和を持った東南アジア諸国の共同体を作り上げてきた」「我々の豊かな多様性は、お互いが強い共同体の意識を醸成するために、強さと感性を我々に与えてきた。」と述べられている。ここに、ASEAN が一つの「共同体」足りうるという思想を見て取ることができ、くしくもアジア通貨危機に際して、そうしたメッセージを出した ASEAN の主導者の英知が結集されていると私は考える。

ERIA は ASEAN の 50 周年を祝し、過去の歴史を総括するとともに、今後 50 年の更なる ASEAN の発展を祈念して、『ASEAN at 50: Retrospective and Perspective of on the Making, Substance, Significance, and Future of ASEAN』をフィリピン外務省と協力して上梓する。全 5 巻から構成される同記念出版では、3 つの共同体にまつわる個別テーマを取り扱うのみならず、第 1 巻においては、現職・元職の ASEAN 各国の首脳級から東アジアにおける各国の発展について回顧と展望を披露してもらっている。これらから明らかになったことは、異なるイデオロギー、文化、宗教、政治体制を持つ ASEAN10 カ国が集合し、世界第 7 位の市場、第 3 位の労働力を有する一大経済圏を築き上げるためには、対話国による「経済協力」を受けつつ、各国自身による「国家建設」への強い意思と努力が極めて重要であったということである。

ERIA は、微力ながら ASEAN 創設 50 年の軌跡のうち最後の 10 年間の発展を支援してきた。まさにこの最後の 10 年間は、上述の「経済協力」から「経済統合」へ、そして「国家建設」から「共同体建設」へと、ASEAN がその目標を大きく進化させる転機であったのではないかと感じている。それに伴い、ERIA に期待される仕事についても、設立当初の経済共同体に関する調査研究から、社会文化共同体や政治安全保障共同体に関する調査研究までその活動の幅を広げつつある。特に社会文化共同体に関しては、元タイ首相のアピシット氏が、同記念出版の第 4 巻の中で以下のように述べているので紹介したい。

ASEAN 社会文化共同体で最も重要な側面は、参加もしくは関与することの目的と ASEAN アイデンティティの創出である。(中略) 官僚ではなく政治指導者こそが、(ASEAN の) 前進(?) のために、責任を引き受けなければならない。ASEAN という「民族」は、将来へ ASEAN を導く我々自身のアイデンティティと価値を生み出す。

次の 50 年を見据え、ASEAN 社会文化共同体に関係する措置は、健康、教育、災害マネジメントと長期的な課題として列挙されている。これらの問題は、ASEAN の一般大衆にとってあまねく重要なものばかりであり、「腰を据えて」取り組む必要がある重要な課題だと言うことができよう。

果たして 50 年後の ASEAN はいかなる姿になっているだろうか。国連や世銀の統計によると、ASEAN の総人口は 8.5 億人になると見込まれ、また ASEAN の人口のすべてが「高所得国」に分類されるような時代が来るとの見方もある。ERIA は今後とも ASEAN の経済統合と発展に向けて、学術研究とそれに基づく政策提言という「ペンの力」でより一層支援してまいりたい。

#### 参考文献

- Amitav Acharya, “Ideas, Identity, and Institution-Building: Making Sense of the “Asia Pacific Way,”” *Pacific Review*, Vol 10, pp. 319-346, 1997.
- Ponciano Intal, Jr. and Lydia Ruddy, *ASEAN @ 50 Volume 2: Voices of ASEAN: What Does ASEAN Mean to ASEAN Peoples?* ERIA 2017.
- Aileen Baviera and Larry Maramis, *ASEAN @ 50 Volume 4: Building ASEAN Community: Political-Security and Socio-cultural Reflections*, ERIA, 2017